

調査報告 ニューヨークにおけるヴィジブル・ストレージの取り組みについて

—ブルックリン・ミュージアムを中心に

加野 恵子

はじめに

このたび、公益財団法人カメイ社会教育振興財団の助成を得て、2019年11月4日～12日の期間で、ニューヨークにおいて、ヴィジブル・ストレージの調査を行った。調査先は、ブルックリン・ミュージアム、メトロポリタン美術館、ニューヨーク歴史協会である。

本調査では、この3館を視察調査するとともに、ブルックリン・ミュージアムで聞き取り調査を行った。当館では今後、ヴィジブル・ストレージを参考に、展示と収蔵の境界を越えたコレクション公開の、新たなかたちを提案したいと考えている。ブルックリン・ミュージアムは、事前調査によって、ヴィジブル・ストレージの活用の仕方や規模等、今後の当館の活動において、最も参考になると判断し、注目したものである。取材にお答え頂いたのは、同館アメリカン・アート・アシスタント・キュレーターのマルガリータ・カラソウラス氏と、コレクション・マネージャーのウォルター・アンダーソンズ氏である。

■ヴィジブル・ストレージ (Visible Storage)

近年、「オープン・ストレージ (open storage)」や「ヴィジブル・ストレージ」と呼ばれる、①コレクションを保管している収蔵庫の一部をガラス張りにして見せる施設や、②見せる収蔵庫として作られ、コレクションを収蔵庫に保管しているように (高密度に) 展示して見せる施設を、戦略的に設置する博物館や美術館が増えてきた¹⁾。スペースの都合で収蔵展示を行うことは、近代的なミュージアムの成立以前からあるが、近年のこれらの取り組みの主な目的は、普段は収蔵庫に保管されていて見ることができない作品をできるだけ多く公開することや、ミュージアムの収集、保存といった機能を伝えることにある。日本でも、特に所蔵点数の多い埋蔵文化センターや、様々な資料を所蔵する総合博物館等でこうした試みが増えてきている。収蔵庫を見せる窓を作った事例としては、2005年開館の九州国立博物館がよく知られている。今回は特に②を調査対象とし、本報告書ではこのような施設を「ヴィジブル・ストレージ」と呼ぶこととする。

ヴィジブル・ストレージは、1976年ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館 (Museum of Anthropology at the University of British Columbia、ヴァンクーバー) の取り組みが起源とされる。そして今回調査に訪れたニューヨークのメトロポリタン美術館、ニューヨーク歴史協会、ブルックリン・ミュージアムの事例は、美術館のコレクション公開のあり方に広く影響を与えた点で重要である。3館はいずれも、ヘンリー・ルース財団が助成を行い、アメリカン・アートのスタディ・センターとして、ヴィジブル・ストレージがつけられたミュージアムである。

■ニューヨークのヴィジブル・ストレージの背景—ヘンリー・ルース財団 (Henry Luce Foundation)

ヘンリー・ルース財団は、出版社タイムの共同創設者で

編集長であったヘンリー・R・ルース (1898-1967) によって1936年に設立された、ニューヨーク州の非営利団体である。アジア、高等教育、宗教と神学、芸術、公共政策に関する分野への助成やリーダー育成のプログラムを行っている。同財団はその一環として、ミュージアムの所蔵するアメリカン・アートの研究と展示のために助成金を出している。なかでもヴィジブル・ストレージは、普段、展示室のスペースの制約があって、収蔵庫に眠っている多くのコレクションを一般に公開し、学ぶ機会をつくるという、民主的な目的を果たすと同時に、専門家の研究促進にもなるとして、同財団が助成対象としたものである。同財団の助成によって1988年に創設されたメトロポリタン美術館の大規模なヴィジブル・ストレージは、ヴィジブル・ストレージの手法を広め、美術館のコレクション公開のあり方に一石を投じた。その後も同財団の助成によって、2000年ニューヨーク歴史協会、2005年ブルックリン・ミュージアムと、ニューヨークに集中してヴィジブル・ストレージがつけられた。このことが、欧米を中心としたヴィジブル・ストレージ、またはそれに類する施設の開設のブームへと繋がっているものと思われる。さらに助成は続き、2006年にはワシントンのスミソニアン・アメリカン・アート・ミュージアムにも広さ24,000平方フィート (約2,230㎡) で天井の高い大規模な空間のルース・センター (Luce Foundation Center for American Art) (ヴィジブル・アート・ストレージ&スタディ・センター) がオープンしており、3,000点以上の展示物を活用した活発なプログラムが行われている²⁾。

各館の調査

■ブルックリン・ミュージアム (Brooklyn Museum)

1 概要

同館のヴィジブル・ストレージは2005年に創設された。同館の5階には、ルース・センター (Luce Center for American Art) としてアメリカン・アートの常設ギャラリーと、ヴィジブル・ストレージ (Visible Storage・Study Center) が併置されている。常設ギャラリーもヘンリー・ルース財団の助成によってリニューアルされ、2001年「ア



fig1 入口付近から見たヴィジブル・ストレージ

メロリカン・アイデンティティズ (American Identities: A New Look)」と銘打ち、先に開設された³⁾。ヴィジブル・ストレージは5,000平方フィート(約464.5㎡)の面積を持ち、展示によってその都度増減はあるものの、2,500点におよぶ⁴⁾、広範なアメリカン・アートを公開している。常設ギャラリー同様、来館者は開館中自由に訪れることができる。

2 展示

同館のヴィジブル・ストレージに展示されているのは、アメリカの絵画や紙作品、彫刻(～1945年)と装飾美術であり、ネイティヴ・アメリカンやスペイン植民地時代のものも含まれる。ヴィジブル・ストレージ内の配置はマップ(fig.2)のとおりである。正面と左右に、常設ギャラリーとの境となるガラス戸があり、奥には絵画ラック(美術館の収蔵庫で使われるローリング・ラック)がある。絵画ラックとその他のコーナーはガラスの壁で仕切られており、手前の空間には、夥しい数の彫刻や様々な装飾美術が収められたガラスのハイケースが立ち並ぶ。各ケースの間は狭く一人二人が通れる程度である。右手には彼らが「アルコーヴ」(alcove = 床の間)と呼ぶ、壁面と引き出しの小さな展示スペースもあった。その他、大型の全身像の彫刻や自転車(ボーデン・スペースランダーのプロトタイプ)等の作品が単独で展示されており、それらのブロンズ彫刻と石彫は台座の上に露出展示されていた。ケース無しの展示となっているのは他に、「コンテンポラリー・ファニチャー」のコーナーの天井にぶら下げられたシーリング・ライトの作品のみである。

なおルース・センターのヴィジブル・ストレージは基本的に作品を展示公開する場であり、同館には他に収蔵庫がある。そのため貸出や保存上の理由、展示内容の変更のために、収蔵庫や常設ギャラリーとの作品の入れ替えも行われる。

2-1 絵画ラックの展示

マップ(fig.2)の番号15、16、23、24が絵画ラックである。それぞれにA～Nの記号がふられたラックがあり、計56枚に合計600点以上の絵画が掛けられている。各スクリーンの大きさは約4m四方、面は金網状になっており、下に車が付いている仕様だった。マップ(fig.2)の15と16の間、23と24の間に設けられたスペースには、スクリーン一面分が引き出せるようになっており、訪問時は15、16、23、24の最前列のスクリーンと、間に引き出したスクリーンの

計6面を見せていた⁵⁾。それら6つのラックには、カラソウラス氏によれば、「スペイン植民地時代の絵画」(24-A)、「18世紀から19世紀初頭、植民地時代の肖像画」(24-H)、「ハドソン・リヴァー・スクールの風景画」(23-A)、「19世紀の風俗画」(16-A)、「風景画」(15-F)、「20世紀初頭のアメリカのモダニズム絵画」(15-A)と、テーマがあったが、テーマを明言しているのは、(24-A)のラックの「植民地時代の絵画(Focus on Colonial Painting)」のみで、この特集には詳しい解説も添えられてあった。他は表示が無かったが、スクリーンごとに主題のまとまりがあることは一目瞭然だった。カラソウラス氏によれば、6つのテーマは開館以来あまり変えられていないが、これら「特集スクリーン」でできるだけミニ展覧会をしていきたいと考えているとのことだった。



fig.3、4 絵画ラックの展示

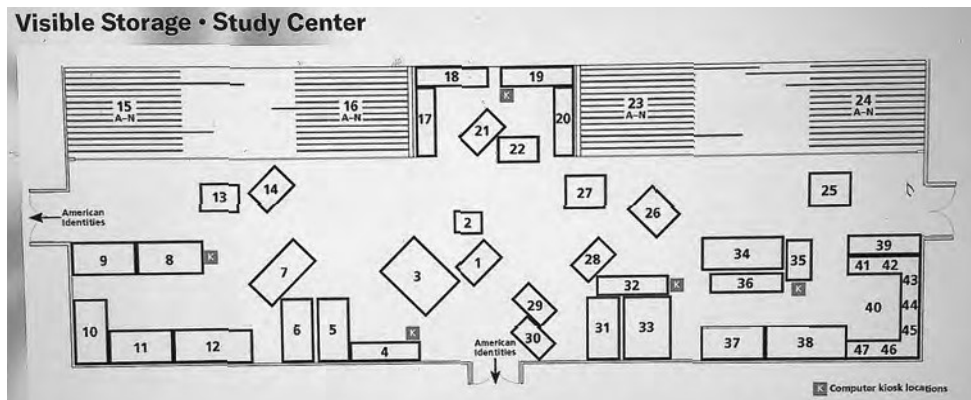


fig.2 ヴィジブル・ストレージの「マップ」(端末の検索画面、部分)

2-2 ケースの展示

マップ (fig.2) の番号1~12、17~22、28~39の30個がガラスケースであり、合計1,500点以上が展示されていた。それらは天井近くまである(約4m弱)アルミフレームのハイケースで、中は複数の棚で仕切られており、多くの作品が入られるようになっていた。それぞれケースごとに番号と、「シルバー」、「セラミック」、「ピューター (白鐵)」等の素材や、「彫刻」、「ネイティブ・アメリカン・アート」、「18世紀家具」、「ティファニー」、「コンテンポラリー・デザイン」等、美術のジャンルや時代、作り手等の分類が記されていた⁶⁾。中には「特別展」と称し、「アメリカ大陸の古代の宝物 (Ancient Treasures of the Americas)」、「メタモルフィック・ファニチャー (Metamorphic Furniture)」等の小特集を詳しい解説や映像とともに紹介するケースもあった。棚の色はアルミのままの色を基調に所々、青や黄色もあり、アンダーソンズ氏によれば、当初は青の棚の作品は小冊子に載せるつもりだったとのことで、棚の色で注目のポイントを作っていた。

ティファニーのランプや花瓶のガラス作品は、もともと4階の装飾美術のギャラリーにあったが、5階のヴィジブル・ストレージに移され、名前を冠したケースに展示されている。アンダーソンズ氏によれば、空間はティファニーの秀作が目線の高さに来るように工夫されているとのことで、常設ギャラリー側からも、ガラス戸越しに光るティファニー・ランプが見え、ヴィジブル・ストレージの中へと誘われる。地味な作品が多いヴィジブル・ストレージだが、ティファニーの作品が、ここを訪れるきっかけのひとつにもなっていたようだ。



fig.5 シルバー、プレスト・ガラス、ピューター (白鐵) 等のケース



fig.6 特別展メタモルフィック・ファニチャーのケース

2-3 アルコーヴの展示

「アルコーヴ」と呼ばれるコの字型の空間には、マップ (fig.2) 番号40の壁面3面と、引き出しの上にアクリルを被せて展示台にしたスペース、引き出し (マップ (fig.2) 番号41~47、各A~Fの6段、計42段)があり、合計400点以上が展示されていた。同館では、紙等の光に脆弱な素材の作品は、6ヶ月で展示替えをしており、二人の説明によれば、もともとアルコーヴは約6,000点ある同館のアメリカン・アートの紙作品をローテーションして展示するためのスペースでもあったという。しかし紙作品は期待したほどの点数を展示できていないというのが実状であるようだ。現在マップ (fig.2) 番号40の壁面と引き出しの上のケースは「特別展」と称して展示替えを行っており、訪問時は小さめの油彩画が展示してあった。引き出しの中には、アメリカ大陸全般を範囲とした先住民のものから、植民地時代、独立後から現代に至るまでの様々な装飾品等が入れられており、詳しい解説も添えられていた。引き出しは、作品の光への暴露時間を減らすだけでなく、来館者自身の手で発見する喜びを得られるメリットがあるため、よく使われる手法だが、運用上は、引き出しをしまわない人がいたり、角をぶついたりする等の問題があるため、改善したいとのことだった。



fig.7 アルコーヴの展示



fig.8 引き出しの中

3 解説等

「特別展」のコーナー、引き出しの中や、「植民地時代の絵画」にフォーカスした絵画ラックの展示、また大きな彫刻や自転車等の単独の展示をしている作品には解説が付けられており、それ以外にも、要所要所には、ケースの内容や作家に関する解説を差し込んだバインダーが下げられて

いたが、基本的に作品には所蔵品番号を記したキャプションが付いているだけであった。

来館者が作品を詳しく知るための主な手段は検索システムである。マップ (fig.2) の「K」は、「キオスク (kiosk)」と呼ばれる検索コーナーであり、ヴィジブル・ストレージ内の5カ所に、タブレットと椅子が置かれ、座って検索ができるようになっている。実際、バインダーに綴じられた解説は更新が後回しになっているとのことだった。キオスクの端末では現在、「マップ」「テーマ」「アドヴァンスト・サーチ」から検索することができ、ケースに書かれた番号や素材、キャプションに記された所蔵品番号等を入力して、目の前のコーナーや作品の詳細情報を得られる。作家名を入力して作品の展示場所を探すことや、高いところに展示されてキャプションが読めない作品を「マップ」から検索して情報にたどり着くこともできる。検索は同館のウェブサイトからも可能である⁷⁾。

もうひとつ、同館が力を入れているのが「アスク・ブルックリン・ミュージアム」アプリである。より詳しく知りたい人は、現地でのみ使用できるこのアプリを自身のスマートフォン等にダウンロードすると、チャットでリアルタイムに質問をすることができる。美術史や教育、考古や人類学の専門がいるチームでその対応にあたっているが、リアルタイムに反応することや、美術館に適さない質問が来たときにどうするかなど、試行錯誤しつつ、教育的な回答を心がけているようであった。

カラソラス氏によれば、来館者はヴィジブル・ストレージでは、あまりガイド・ツアーには参加せず、自分自身の興味に従って自分のペースで検索する人が多いとのことだった。



fig.9 検索コーナー「キオスク」



fig.10 キャプション

4 保存環境等

同館のヴィジブル・ストレージに展示されている作品は、ファイン・アートだけではなく、古代から現代までの装飾美術も対象としており幅が広い。油彩画や紙作品、ブロンズ、木工、銀、白鐵、陶器、ガラス、象牙、革、タイルや現代のプラスチック製品、電子機器もある。変化しやすい有機素材や現代の材料も含まれる。もちろんヴィジブル・ストレージ内は博物館に必要な基準で運用されており、アンダーソンズ氏によれば、温度は60～75°F (15.6～23.9℃)の範囲内、湿度は40%を下回らないように制御している。2005年の開館時に専用の空調にしたが、同館の最も古い部分は19世紀の建築にもなるため、常にエンジニアやコンサルヴァター、デザイナー等と協力しながら、監視や改善を続けているとのことだった。開放的なギャラリーから仕切られた、こぢんまりとした空間であるため、空調は制御しやすいと思われた。

照度も配慮され全体的におさえられていた。以前はケースの棚にELフィルムを使用した照明を入れていた時期もあったが⁸⁾、寿命となり、適当な代替物がないので使用していないとのことだった。現在は天井からLEDスポットライトでケースの作品も照明していたが⁹⁾、棚の下に影ができるため、詳細を見せたい作品のケースには、来館者が作品を照らして見られるように懐中電灯がぶら下げてあった。最も光に脆弱な作品はアルコールのコーナーで6ヶ月の展示替えを行うことで対応している。

室内に監視員はいないが、大型のブロンズ彫刻と石彫、天井にあるシーリング・ライト以外、作品はガラスかアクリルに覆われており、来館者が触れることはできない。これまでセキュリティ上、大きな問題はなかったとのことである。監視員ではなくカメラによって監視を行う体制は、通常の常設の展示室と同じである。

5 まとめ

ブルックリン・ミュージアムは、1823年に、若い商人を教育するための図書館 (Brooklyn Apprentices' Library) として設立された。美術コレクションは、常設の美術ギャラリーの設置を目標に、1850年代に基礎がつくられ、1890年代には、現在の場所に当時世界最大級のミュージアムの建設が進められたが、同館が大きなギャラリー・スペースに見合うようなコレクションの形成を本格化させたのは、20世紀に入ってからのことである。当時同館は、他のアメリ

カのミュージアムもそうであったように、歴史のある西洋のミュージアムに追いつく必要性を感じていた¹⁰⁾。その過程で、エジプトやアジア、ヨーロッパ等の海外美術も数多く収集してきたが、同館がヴィジブル・ストレージを採用しているのは、アメリカン・アートのセクションだけである。それは同館がアメリカン・アートの充実したコレクションを形成してきたことと、アメリカン・アートの普及をひとつの目的としていたヘンリー・ルース財団のポリシーが合致したことによって実現したものだが、コレクション自体、同館によるアメリカのアイデンティティ追求の軌跡であり、展示構成のキュレーションを行っているとはいえ、コレクションの内容を相似的に反映するヴィジブル・ストレージは、その表現の場であったと言える。

アンダーソン氏は、ブルックリン・ミュージアムはヴィジブル・ストレージで広範なアメリカン・アートを紹介したパイオニアであり、大切なのは「大きな意味でアメリカン・アートとは何か」だと語ったが、アメリカのファイン・アートに限らず、アメリカ大陸という広い範囲で、古代から現代までの、様々な素材の装飾美術までを範囲とした、同館のヴィジブル・ストレージの作品群は、アメリカのミュージアムらしく、美術の歴史のみならず、この地の人々の生活の歴史も感じさせるものであった。

またアンダーソン氏は、ヴィジブル・ストレージはアメリカン・アートを新鮮な視点で見せる常設の展示だとも述べていたが、同館のヴィジブル・ストレージは、常設ギャラリーとあわせて、アメリカン・アートのスタディ・センターであり、両者の見せ方の違いが相乗効果を生んでいる。常設ギャラリーでは、ゆったりとした空間でコレクションの最高の作例を見せられるメリットがあるが、コレクションにはまだまだ興味深い作例があり、それらはヴィジブル・ストレージで展示することができる¹¹⁾。むしろアメリカン・アートのまとまりの中で見せた方が生きる作例もある。ヴィジブル・ストレージは、生き続けるアメリカン・アート、そして成長し続けるコレクションを伝えるのにも有効な場所となっており、マップ (fig2) では、ケース18が「コンテンポラリー・デザイン」で19が「ピューター (白鐵)」となっているが、現在はコンテンポラリー・デザインの作品が増え、19の一部に、ニューヨークのメーカー製の今世紀の青いポリエステル樹脂の豚の貯金箱 (ハリー・アレンのデザイン) や地元の小学校で使われたコンピューター (イヴ・ベアールのデザイン) 等が入れられていた。現代のデザインの力にあらためて気づいたからだアンダーソン氏は言う。

果たして来館者は、青い豚の貯金箱をどのように見るだろうか。ヴィジブル・ストレージでは、解説の無い作品群を見て、頭の中で独自のキュレーションをすることもできるし、検索システムやアプリを用いて個々の作品を深く追求していくこともできる。二人が言うように、ヴィジブル・ストレージは多くの作品との出会いと情報を得るチャンスを与え、来館者は自由に考え、学び、自身の経験を深めていくことができる。しかしそれはあくまでも来館者自身の興味と情熱に基づいている。

■メトロポリタン美術館 (The Metropolitan Museum of Art)

同館のルース・センター (The Henry R. Luce Center for the Study of American Art) のヴィジブル・ストレー

ジは、1988年にオープンした。アメリカン・ウイングの中2階に位置し、16,000平方フィート (約1,486㎡) の面積に¹²⁾、1万点以上が展示されている¹³⁾。2001年のニューヨーク・タイムズの記事では¹⁴⁾、18,312点を展示しているとされ、それは同館のアメリカン・アートのコレクションの80%にあたるという。展示されているのは、アメリカのファイン・アートと装飾美術であり、紙作品やテキスタイル等、光に脆弱な作品の見学は予約により対応している。

作品は全てガラスケースに入れられており、絵画も自立したケースに、多くは2段掛けにされていた。ケースの分類は、絵画、彫刻、家具、セラミック、ガラス、シルバー、ピューター (白鐵) 等、素材や大まかな美術のジャンルで行われ、各カテゴリの中で、色や形、可能なものは年代や様式、作家ごとに整理して展示されていた。一角には、額縁の歴史を示すコーナーもあり、古い絵画を多数扱う同館らしい企画であった。天井高は、おそらくブルックリン・ミュージアムよりも低く、壁面ケースはもちろん、自立ケースも横に長いため、視線は主に横方向の動線となる印象であった。ブルックリン・ミュージアムは、カテゴリごとにコンパクトなハイケースが立ち並び、絵画も正方形のラックごとに主題が分けられていたため、視線を縦に動かして膨大な作品を見上げる印象が強かったが、対照的であった。

加えてブルックリン・ミュージアムと最も異なっていたのは、情報がある作品には、所蔵品番号の他に作者名、生没年、作品名、制作年、素材、寄贈者等が書かれたキャプションが付けられていた点である。ケースの分類が、ブルックリン・ミュージアムよりもシンプルなのは、キャプション



fig.11 絵画のケース (つきあたりに見えるのが彫刻のケース)



fig.12 ガラスのケース

に情報があるせいもあるだろう。訪問時、同館のヴィジブル・ストレージ内に検索端末は置かれておらず、会場のパネルで館のコレクション検索サイトのアドレスを示し、来館者自身のスマートフォンやPCから、作品のキャプションに書かれた所蔵品番号を入力すれば、情報が得られることを案内していた。

同館のヴィジブル・ストレージも、入口のガラス戸をくぐれば、ギャラリーの喧噪を忘れさせるような静かな空間だったが、幼い少女と母親らしき女性が、周りを気にすることなく床に座り込んで、お気に入りのガラス製品をスケッチしている姿が印象的だった。

■ニューヨーク歴史協会 (New-York Historical Society)

同館は1804年に設立された、ニューヨークで最も古いミュージアムである。独立戦争の時代を生きた創設者たちの強い使命感が生んだ施設で、アメリカの歴史資料が多数ある。現在はミュージアム&ライブラリとして、子ども歴史博物館と女性センターを含む施設となっているが、メトロポリタン美術館よりも70年早く設立されたこともあり、美術品のコレクションも数多い。

同館のヴィジブル・ストレージ (Henry Luce III Center for the Study of American Culture) が開館したのは2000年、4階全体にあたる21,000平方フィート (約1,951㎡) の面積に¹⁵⁾、絵画、彫刻、家具、銀製品、考古資料、武器、農機具等、それまではほとんど非公開だった4万点もが展示され、コレクションの60%が公開されていたとされる¹⁶⁾。検索端末も設置され、図書館を有する同館は、データを双方で検索できるようにもしていたという¹⁷⁾。

実は同館は、ヴィジブル・ストレージのあった4階のフロアを大きくリニューアルし、2017年に再オープンしたが、その際、ルース・センターの名前は維持しながらも、ヴィジブル・ストレージをやめてしまった。2017年のウォール・ストリート・ジャーナルの記事¹⁸⁾によれば、改修前に公開されていた70,000点ものうちの多くが、ニュージャージー州の収蔵庫へ移され非公開となってしまったという。同記事は、改修前のルース・センターは「たくさん名詞があつて、動詞のない文章」だったと語る、協会代表者の言葉を載せており、新たなルース・センターでは、その代わりに「イマーシヴでインタラクティブな (immersive and interactive) テクノロジー」を用いた「キュレトリアルなインタープリテーション」を選択したと分析する。2016年に書かれた別の記事では¹⁹⁾、当時の館長がヴィジブル・ストレージのあった4階に集客する苦勞を語っており、今後はキュレーションされた展覧会のような「主題と物語主導の展示 (thematic and narrative-driven installations)」を特色にするとしている。残された写真によれば、以前のヴィジブル・ストレージには、メトロポリタン美術館のような自立式の絵画ケースが並ぶ部屋や、天井の高い中2階のある部屋があり、中2階の下階には家具やシルバー、彫刻のケース、上の階には、たくさんの武器のようなものが入られたのぞきケース等が並んでいる。世界数々のコレクションだというティファニー・ランプのコーナーも見えて取れる。いずれも明るく照明が入っていて、空間全体で膨大なコレクションを体感できるような施設であったようだ。

しかし新たなルース・センターは、展示点数をかなり絞ったものとなっていた。特に記事にもあったミッション



fig.13 ノース・ギャラリーの常設展



fig.14 ティファニー・ランプのギャラリー

を体現している4階のノース・ギャラリーの常設展の、16個のブース展示が興味深かった。「彫刻」「玉座」「NYの奴隷制」「港」「インフラ」「レクリエーション」「9.11」「戦争中の国家」等、これまでのヴィジブル・ストレージのような分類だけでなく、シンプルな主題のカテゴリーのブースを作り、アメリカの歴史を伝えられるような構成にしていた。ブースの中は比較的高密度な展示がされている様子は、かつてのヴィジブル・ストレージも彷彿とさせるが、キャプションや解説は写真も入れながら詳しく、分かりやすいものが付けられていた。そしてこれもヴィジブル・ストレージの経験が生かされていると言えるだろうが、各所に配された端末でも作品のデータ、作者やテーマに関する解説が見られるようになっており、そのシステムは今回の視察の中では最も洗練されていた。同館でも天井近くまであるケースを設置し、空間にメリハリと華やかさを加えていたが、端末の写真データから、棚の最上段にある作品の情報を探ることができる点は、まさにヴィジブル・ストレージの手法であった。

そして4階フロアの中央に新たに作られたのが、キュレーターと有名デザイナーによってデザインされた、100のランプが点灯するフォトジェニックなティファニー・ランプのギャラリーである。このギャラリーが集客に大きく貢献することは間違いなく、他の常設展を見てもらうためにも効果的だろう。ブルックリン・ミュージアムでは、ティファニーの作品をアメリカの美術や装飾美術の中で見せていたが、ここはティファニー・ランプ専用の部屋であり、ティファニーの歴史や制作についてもわかりやすく紹介されて

いた。タッチするとランプシェードのガラスの色を変えてデザインすることができるコーナーや、引き出しで多数のガラスを見られるコーナーもあった。どちらも光をとおしたガラスの色彩を体感できるようになっており、子どもの興味も引くだろうと思われた。

数を展示することを主目的にしたヴィジブル・ストレージはやめ、キュレーショナルな展示を選んだ点は、回帰とも取れるが、そこにはヴィジブル・ストレージの経験が生かされており、新鮮な空間だった。大規模館ではないミュージアムのひとつの選択肢だったとも言える。展示室にいた元歴史教師のボランティアは、以前より歴史の背景を学べる展示になったと評価していた。

おわりに

ブルックリン・ミュージアムのヴィジブル・ストレージは、無機質なガラスがひしめき合い、無数の作品がささやき合っているような、おとぎ話の世界に迷い込んだような空間だった。時折ガラス戸を開けて入って来た子どもたちが、静かな歓声を上げていた。ヴィジブル・ストレージの最大の魅力は、コレクションの集積の力だろう。特にブルックリン・ミュージアムのヴィジブル・ストレージには、様々な人々に興味をもたせることができるだけの作品の幅と興行きがあった。美術や歴史等の知識がある人はもちろん、そうでなくとも、大人の記憶をくすぐる家具や工業製品もあれば、子どもの興味を引きそうな動物の彫刻や近未来的な自転車、変身する椅子、キラキラした装飾品もある。ヴィジブル・ストレージは特に子どもたちにとって、まさに「宝箱」になり得るのではないかと感じた。

しかし同時に、今回調査した3館の展示には、膨大なコレクションを野放図にはしない、それぞれさじ加減の異なるキュレーションがあった点、また、新しいメディアを活用していた点は、ヴィジブル・ストレージを内容のあるものとするための参考になった。特に現代の子どもたちにとって、インタラクティブなデジタル・メディアを利用することは身近なことであり、可能性が広がる分野である。言うまでもなく、ヴァーチャルではない実物との出会いを提供するのがミュージアムの使命だが、まさにヴィジブル・ストレージは、その圧倒的な数の作品と情報を繋ぐシステムであり、来館者の体験と教育を重視する姿勢を大切にしているアメリカらしいチャレンジであると感じた。

註

- 1) 「オープン・ストレージ」の言葉は、収蔵庫に入ってツアーを行うウォーク・インの活動にも用いられている。
- 2) https://www.si.edu/search?edan_q=luce および <https://americanart.si.edu/visit/saam/luce> 他
- 3) 同タイトルの展示は2016年まで行われ、現在は「American Art」となっている。
- 4) オープン当初のプレスリリースでは1,500点。2019年12月現在の同館ウェブサイトのリストから数えると2,600点以上。
- 5) 訪問時、実際に引き出していたラックはマップ (fig.2) とは異なる。
- 6) <https://www.brooklynmuseum.org/opencollection/research/luce> 参照。
- 7) 註6) 前掲サイト。
- 8) <https://www.brooklynmuseum.org/community/blogosphere/2009/07/22/luce-center-timex-night-glo-on-steroids/>
- 9) アンダーソンズ氏によれば、同館ヴィジブル・ストレージの開館以来、大きな改修をしたのは2016～17年であり、主な目的は照明のLED化や使いづらくなった鍵の更新だったとのことである。
- 10) Kevin L. Stayton, "The Brooklyn Museum Collection an Introduction", *Collecting for the Future: A Decade of Acquisition Highlights*, Brooklyn Museum, New York, 2012. 他を参照した。
- 11) 2001年ルース財団の助成を受け、公開された常設展示「アメリカン・アイデンティティズ」では、カラソウラス氏によれば、450点(ヴィジブル・ストレージのオープン当初のプレスリリースでは350点)を展示していたが、現在の常設ギャラリーでは225点ほどまでに数を

アメリカとはコレクション形成の歴史の異なるヨーロッパでも特に2010年代以降、ヴィジブル・ストレージやオープン・ストレージを持つ美術館が増えてきており、有名などころではイギリスのヴィクトリア&アルバート・ミュージアムやフランスのルーヴル・ランスのような事例がある。また2015年にロサンゼルスに開館したザ・ブロードは、建築全体のコンセプトとして美術館の裏側を見せることを前面に押し出し話題となっている。ザ・ブロードやイエローストーン美術館では、ヴォールト (vault = 地下金庫室) と呼ばれる収蔵エリアを公開するだけでなく、そこで働く人々の様子も見せることによって、収集や保存といった美術館の機能を伝えることに力点を置いており、こうした試みが近年増えているようである。これらについても、今後の調査課題としていきたい。

なお聞き取りによれば、ブルックリン・ミュージアムでも、ヴィジブル・ストレージ内で開館中にスタッフが作品を扱う仕事をする 경우가あり、その様子を来館者に見せることは厭わないという²⁰⁾。しかし同館の場合、あくまでもそれを見せることがこの施設の目的ではない。もちろん作品を収蔵庫で保管している時のように高密度に展示すること等で、作品の収集や保存というミュージアムの機能も伝えているが、ブルックリン・ミュージアムのヴィジブル・ストレージは、特に、自館のアメリカン・アートのコレクションをいかに伝えるかという課題に取り組み、成功した事例であると考えている。同館から特に学んだのは、ヴィジブル・ストレージを自館に応用する場合には、形成してきたコレクションの何を、どのくらい、どのように見せるのかという課題を明確にすることが、第一段階のポイントとなるという点である。

インタビューのための窓口となって下さった、ブルックリン・ミュージアムのキュレトリアル・アシスタントのシェア・スピラー (Shea Spiller) 氏、多忙なか時間を割いてインタビューに応じてくださったマルガリータ・カラソウラス (Margarita Karasoulas) 氏とウォルター・アンダーソンズ (Walter Andersons) 氏、助成によってこの調査を応援して頂いた公益財団法人カメイ社会教育振興財団の皆様をはじめ、本調査を実現するにあたり、多くの皆様にご尽力を頂いた。深く感謝申し上げます。

(宮城県美術館 主任研究員)

減らしてしまったという。同氏によれば、アメリカン・アートのコレクションで見せたい作品には、約1,200点の絵画、230点の彫刻、6,000点の紙作品、その他膨大な美術品があり、ヴィジブル・ストレージでも、まだまだ展示しきれておらず、来館者に新たな期待を持ってもらうためにもより積極的に展示替えを考えたいと話していた。

12) Theodora Lurie and Michael Gilligan, *Henry Luce Foundation AT 75 YEARS*, Henry Luce Foundation, New York, 2012, p.35

13) <https://maps.metmuseum.org/>

14) Celestine Bohlen, "Museums as Walk-In Closets; Visible Storage Opens Treasures to the Public", *The New York Times*, May 8, 2001.

15) 註12) 前掲文献。

16) 註12) 前掲文献。展示品の内容についてはニューヨーク歴史協会のパンフレットを参照した。

17) ニューヨーク歴史協会のパンフレットを参照した。

18) James Panero, *The Wall Street Journal*, April 26, 2017.

19) Karen Kedmey, "These New York Museums Let Visitors Go behind the Scenes to Explore Their Brimming Storage Facilities", <https://www.artsy.net/article/artsy-editorial-new-york-museums-open-their-storage-to-the-public-putting-their-vast-collections-on-display>, Feb 12, 2016.

20) 作業の内容によっては扉を閉めることもあるが、その場合も来館者はガラス戸を通して中の作業を見ることができるとのことだった。

※上記のウェブサイトはいずれも2019年11月、12月時点でのアクセスによる。

助成 公益財団法人カメイ社会教育振興財団(仙台市)

宮城県美術館
平成30年度 年報
令和元年度 研究報告

発行日 令和2年3月31日

編集・発行 宮城県美術館
980-0861 仙台市青葉区川内元支倉34-1
TEL 022-221-2111
FAX 022-221-2115

印刷 今野印刷株式会社
984-0011 仙台市若林区六丁の目西町2-10

©宮城県美術館 2020 printed in japan

この年報は350部作成し、1部あたりの印刷単価は1804円となっています。